

〈研究論文〉

# 学習者間の協働学習を主体としたハイブリッド型授業の試み

— 対面教育と同期型オンライン教育で学ぶ学習者間のインタラクションを通して —

大塚 薫

## 要 旨

本研究は、オンライン学習ツールとしてMicrosoft Teamsを活用し、対面教育と遠隔地に点在する学習者が、いかに主体的に授業に参画できるかを実践した上で検証し教育現場での直接的な応用を目的としたものである。具体的には、2020年度後期に行われた上級日本語の授業で、論理的な文章力及び発表する能力の習得を目的とした学習者同士の協働学習を主体としたハイブリッド型授業が実施された。

今回の授業に対する学習者の評価は5段階中4.78で好評価を博し、特にハイブリッド型授業のメリットを生かした教室と海外にいる学生とのピア・ラーニング活動を主軸に据えた授業設計によるクラスの雰囲気づくりや討論・発表を通じた内省、異文化理解の視点の獲得等が利点として挙げられた。

## 【キーワード】

ハイブリッド型授業、日本語学習者、協働学習、対面教育、同期型オンライン教育、Microsoft Teams

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、日本では2020年4月から外国人留学生の円滑な受入れに支障をきたしており、2022年2月現在においても日本政府の水際対策の一環で、交換留学生は入国に規制がある状況が続いている<sup>1)</sup>。高知大学でも2020年4月からは国費留学生数名のみ入国できてはいるが、一部の国費留学生や私費留学生ならびに交換留学生はいまだ入国できていない。

新型コロナウイルス感染症の拡大以前は、表1で示した通り130名前後で推移していた留学生数が、2020年度以降急激に減少していることが分かる（表1参照）。これは、2020年度は交換留学生の受入れが全くなかったこと、2021年度はオンライン留学を推奨し、渡日せずにオンラインのみで高知大学の授

業を履修することができるよう交換留学生に学籍を付与することになったが、来日できないためにオンライン留学を辞退した協定校の学生がかなりいたことに起因する<sup>2)</sup>。また、水際対策により入国できないため、研究生としての受入れ数も2021年度には激減している。このような状況が続くと、2022年度からは国内の日本語学校で勉強している限られた留学生の奪い合いが生じる。その上、新型コロナウイルス感染症の影響で2年間で15万人の外国人留学生が海外で渡日できず待機しているとの報道があるが、国外で来日を待っている学生が待ちきれずに日本以外の第三国に留学先を選ぶことも考えられ、今後さらに厳しい状況になることが予想される。

表1 高知大学における留学生の受入れ数の推移 各年5月1日現在

年度	学部	修士課程	博士課程	交換留学生	研究生	合計
2017	39	15	31	36	9	130
2018	30	18	35	51	6	140
2019	27	20	31	38	9	125
2020	30	15	30	24	9	108
2021	28	15	27	14	2	86

このような状況下であり、本研究は、2020年度第2学期に共通教育で実施された上級日本語授業において、2020年4月ならびに10月に協定校から高知大学に交換留学に来る予定であった学生を対象に授業を開放し、日本で受講する留学生は対面教育で、海外から受講を希望する学生はオンライン教育で受講してもらえるようハイブリッド型授業を試みたものである。本授業のオンライン学習ツールとしてはMicrosoft Teamsを活用し、対面教育の学習者と遠隔地に点在する学習者が協働し、いかに主体的に授業に参画できるかを実践した上で検証し、教育現場での直接的な応用を目的としたものである。

## 2. ハイブリッド型授業の種類及び特徴

2020年はオンライン教育元年と言われ、コロナ禍において急速にオンライン教育が全世界に普及した年だと言える。小椋(2020)は、従来から通信制大学などで授業のオンライン化は進んでいたが、通学型大学でも対面授業を補完する意味合いで徐々に広がりつつあったと述べている。そして、今後の大学における授業は、オンライン授業と対面授業を組み合わせた形式での実施、

すなわちハイブリッド型授業が主流となると予想されているという。ここでは、ハイブリッド型授業の種類と特徴について見ていきたい。

## 2.1. 小椋(2020)によるハイブリッド型授業の分類

小椋(2020)によると、オンライン・対面の併用(ハイブリッド)型授業は、対面かオンラインか、同期か非同期かにより「従来の対面授業」からの距離を以下のような図で示され、「リアルタイム型オンライン授業」、「オンデマンド型オンライン授業」、「ブレンド型対面授業(反転授業)」、「ブレンド型オンライン授業」、「分散型対面授業」、「ハイフレックス型授業」の6つの種類に分けられている(図1参照)。

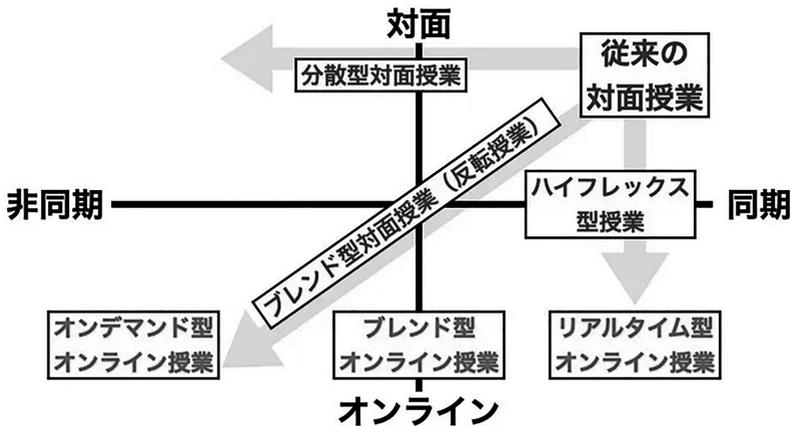


図1 オンライン・対面の併用(ハイブリッド)型授業の特徴 出典:小椋(2020)

小椋(2020)は、「リアルタイム型オンライン授業とは、その授業に割り当てられている時間割に、遠隔会議システム(zoom, webex, teamsなど)を用いて授業を実施すること」と述べている。そして、少人数クラスでの演習科目やゼミナールに適し、参加者同士の関係性が対面時よりフラットになるため、受講生の発言や質問が多くなった、ディスカッションが活発になったという事例報告も数多くあるとのことである。

「オンデマンド型オンライン授業」は、知識伝達型授業に適し、「教員が収録・作成しておいた講義動画をYouTubeやLMSにアップロードして、その講

義に割り当てられている時間割とは無関係に受講生に視聴してもらう実施方法」と説明している。受講生は、時間割の制約にとらわれず、好きな時間に講義動画を視聴して学習することができるとともに、理解が曖昧な箇所を何度も視聴し理解を深めることが可能である。

「ブレンド型対面授業（反転授業）」とは、「オンデマンド型オンライン授業と対面授業を組み合わせて実施する方法であり、以前から反転授業という名称で多くの実践が積み重ねられている形式」だという。「ブレンド型オンライン授業」とは、「ブレンド型対面授業（反転授業）の対面部分をオンライン化したもの」であり、「別の表現では、オンデマンド型オンライン授業の質疑応答パートをリアルタイム型オンライン授業として実施する」という捉え方もできるとのことである。

「分散型対面授業」とは、実習・実験や演習科目のようにオンライン化が不可能または困難な科目の場合、クラスを二分割にして、一方のグループが対面授業で指導を受けている間、もう一方のグループは別室で授業に関連した別の内容の学習をするという授業方式だそうである。

「ハイフレックス（HyFlex）型授業」とは、「『柔軟なハイブリッド』型授業（Hybrid-Flexible）の意味の造語」であり、この形式では、対面で実施している授業を同時にオンライン配信するものである。受講生は、自分の希望あるいは教員の指示により対面で受講するかオンラインで受講するかを選択することができ、授業の内容は対面側とオンライン側で同一になると説明している。また、ハイフレックス型授業では、教員は対面側とオンライン側で同等の学習内容及び学習効果が得られるよう授業設計及び実施方法に入念な準備が必要になり、教員以外の授業補助者も必要になるとのことである。そして、従来型の教室でハイフレックス型授業を実施する場合、スクリーン、マイク、スピーカー等設備備品の仕様・性能を事前に検討しておく必要があるという。

## 2.2. 京都大学高等教育研究開発推進センターによるハイブリッド型授業の分類

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、オンライン授業と対面授業を組み合わせて実施する、いわゆるハイブリッド型授業には、いくつかのパターンがあるとし、「ハイフレックス型」、「ブレンド型」、「分散型」の3つの型に分類している。「ハイフレックス型」は、「同じ内容の授業を、対面とオンラインで同時に行う授業方法」とし、学生が同じ内容の授業を、オンライ

ンでも対面でも受講できる。教員は対面で授業を行い、学生は自身の状況に応じて対面授業を受講するか同時双方向型のオンライン授業を受講するかを選べる形式である。ただし、コロナ下では教室に入れる人数に制限があるので、対面かオンラインかをあらかじめ決めておく必要がある場合もあるとのことである。「ハイフレックス型」のメリットは、学生は、置かれた状況に応じて、オンライン授業を受けるか対面授業を受けるか選択できること、対面授業の実施が不可能になった場合にも、フルオンライン授業への移行が容易なことが挙げられている。また、デメリットは、教室環境の設定が大変で事前のテストも必要なこと、教室と対面の両方の学生に注意しながら授業を行うため、教員の負荷が高いことが挙げられ、TAがいることがのぞましいと指摘している。

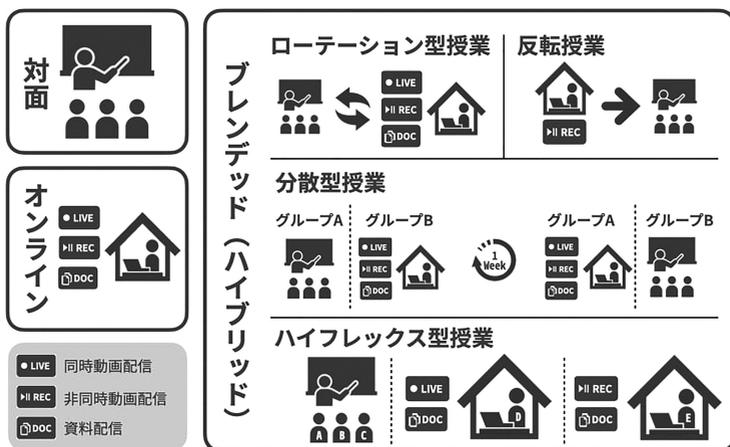
次に、「ブレンド (Blended) 型」の授業は、授業の目的にあわせて対面とオンラインを組み合わせて授業を実施する方法である。例えば、15回の授業のうち初回や対面が望ましい回を対面で実施し、それ以外はオンラインで実施する等が考えられる。対面授業の回を絞り込むことは、感染リスクの軽減や教室環境の準備の負担軽減にもつながるといえる。メリットは、各回の授業の目的にあわせて対面、オンラインを選択するため教育効果が高いこと、対面での反応とオンラインでの反応の両方を確認しながら授業を進めることができることが挙げられる。デメリットは、全員が対面授業に参加する回があるので、十分な広さの教室を確保する必要があること、オンラインしか参加できない学生に対しては、対面と全く同じ効果は見込めないことが挙げられ、授業の録画ビデオや説明を付した配布資料を共有する等のフォローが必要となるという。

最後に、「分散型」の授業は、「同じ回に異なる内容の授業を対面とオンラインで行い、学生は分散して受講する授業方法」だという。分散型の授業は、コロナ禍で急遽必要な場合に実施する方法であり、具体的には、受講生を学籍番号の奇数・偶数等で分け、半分の学生は対面授業を受講、残りの学生はオンライン授業（教員が準備したオンデマンド型、あるいは別教員やTAによる同時双方向型の授業）を受講させ、次の回ではそれを入れ替えるといった方法だと述べている。実験や実習でクラス全員が出席する必要があるにも関わらず、そのための設備が整っていない場合等に適応できる。メリットは、人数制限が必要な対面授業を、授業回数を増やすことなく実施可能なことであり、デメリットは、オンライン授業、対面授業の両方の準備を平行して行

う必要があるため、教員の負荷が非常に高いこと、学生によっては対面とオンライン授業の順序が違うことに注意してオンライン授業で扱う内容を選択する必要があるため、コースデザインが複雑であることだと指摘している。

### 2.3. 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部によるハイブリッド型授業の分類

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部では、ブレンデッド教育として「対面とオンラインの学習活動を効果的に組み合わせたカリキュラムおよび授業形態の総称」と定義し、ハイブリッドとはほぼ同義で用いられており、「ローテーション型授業」、「反転授業」、「分散型授業」、「ハイフレックス型授業」の4つに分類されている（図2参照）。



※各授業型の用語は、欧米や日本における一般的な定義をレビューした上で作成しています。組織や研究者によっては、異なる定義がされていることもあります。

図2 ブレンデッド教育の分類 出典：大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部（2020）

「ローテーション型授業」とは、「1つのコースや授業において、一定時間ごとに学生が異なる学習形態（対面、オンライン、協働学習等）をローテーションで移動してまわる授業形態」のことだと述べている。「反転授業」とは、「動画教材で予習し、教室では個別指導や協働学習を行う授業形態」のことで、「ローテーション型授業の一形態とされることもある」とのことである。「分散型授業」とは、「学生をグループ分けし、一方を対面で、もう一方をオンラインで実施し、次回の授業でそれを交代する授業形態」であり、「コロナ禍に

おける実験や実習で急遽必要とされている」という。「ハイフレックス型授業」とは、「Hybrid-Flexibleの略」で、「対面、同期オンライン、非同期オンラインが提供され、学生が自在に選択することができる授業形態」と説明している。

#### 2.4. 本研究におけるハイブリッド型授業の定義

本研究のハイブリッド型授業は、小椋(2020)及び京都大学高等教育研究開発推進センター(2021)、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部(2020)の言う「ハイフレックス型授業」に近い形態だと言える。しかし、ハイフレックス型授業の条件としては、3者ともに「授業の内容が同一であり、受講生が置かれた状況に応じて、対面教育かオンライン教育かを自在に選択できる形態」としている。もともと「ハイフレックス型授業」は、米国のサンフランシスコ州立大学のBeatty教授が、大学院での授業で試みた方法の名称であり、ハイフレックス方式と呼べる条件としては、1)教室とオンラインという少なくとも2つの学習への道筋があること、2)これらの学習への道筋の中での学生の選択(柔軟性)を常に支援し続けていること、である(Beatty,2020)。また、Beatty(2020)によると、ハイフレックス方式の長所として、①学習者側が選択できること(learner choice)、②同等の内容を学べること(equivalency)、③繰り返して利用できること(reusability)、④様々なモードでの情報アクセスができること(accessibility)が挙げられている。

しかし、本研究のハイブリッド型授業の場合、「授業の内容が同一」ではあるが、受講生は日本にいる学生は対面教育で、海外にいる学生はオンライン教育で受講しており、「受講生が置かれた状況に応じて受講形態を自在に選択できる」という点でハイフレックス型授業とは言えない。日本在住の学生は自身の都合により受講方法を選択できるが、海外にいる学生はオンラインしか選択肢がないためである。そこで、本稿では、「ハイフレックス型授業」とは用いず、「ハイブリッド型授業」と述べ、「一つの授業に対面とオンライン同期型で参加する受講生が存在し、教員が学習者の状況に応じて参加形態を決め学習者はその形態で受講する形式」の授業とする。

### 3. ハイブリッド型授業の概要及び実践状況

2020年度第2学期に共通教育で行われた上級日本語の授業において、正規生3名(中国2名、韓国1名)と現地にいる交換留学を希望する協定校の学生9

名（中国3名、インドネシア3名、台湾2名、韓国1名）を対象としてハイブリッド型授業が行われた（表2参照）。

表2 ハイブリッド型授業の概要

授業科目名	共通教育日本語Ⅲ
実施期間	2020年10月2日～2021年1月29日（2020年12月8日～2021年1月29日：リアルタイム型オンライン授業）
授業時間・回数	週2回90分 全30回
授業場所	対面：留学生講義室、オンライン：Microsoft Teams
学習者	対面：正規生3名(中国2名、韓国1名)、オンライン：協定校の学生9名(中国3名、インドネシア3名、台湾2名、韓国1名) <sup>3)</sup>
学習者のレベル	日本語能力試験N3～N1
授業方法	教室で受講する学生3名とTeams上で学習する学生9名に対して資料の共有による教材の指導やペアワーク・グループワーク・討論等協働学習、発表

### 3.1. ハイブリッド型授業の目標

2020年度第1学期は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、全学的に4月下旬から急遽オンライン教育が実施されることになり、1学期を通してオンライン教育が行われた。そして、2020年度第2学期には感染が収まったため、語学教育は教室で受講する学生数を通常の3分の1とし感染対策を徹底した上で対面授業が行われることになった。しかし、12月に入り新型コロナウイルス感染者が増加しはじめ、大学のフェーズも1から2に上がったため、12月初旬から全学的にオンライン教育に切り替わった。それに伴い、本授業も10月当初からハイブリッド型授業を行っていたが、12月8日より対面教育で学習していた留学生もオンライン教育に変更になり全面的にMicrosoft Teamsによるリアルタイム型オンライン授業になった。

本授業は、外国人留学生対象の上級レベルの日本語科目で、共通教育で開講されている正規の語学授業のため、週2コマ90分授業が15週間あり計30回の授業時間が確保されている。学習者は、対面教育は高知大学の学部の正規生3名が履修し、オンライン教育は協定校である6つの大学から9名の学生が受講を希望した。学習者のレベルは、正規生は日本語能力試験N1レベルであったが、協定校の学生は現地で日本語を専攻している学生のため、N3レベルからN1レベルまで比較的幅広いレベルの学習者が存在した。授業目標は、論理的な文章を書く力を養うとともに、自分の考え、意見を論理立てて発表

する能力の育成を目指しており、その目標を達成するために学習者が協働しながら互いに学んでいくピア・ラーニング活動を取り入れつつ授業を進めていった。

なお、協定校から受講を希望した学生は、正規の学生ではないが、正規生と同様Microsoft Teamsを活用しつつ受講できるよう高知大学のID及びパスワードを発行してもらい、受講に対して不利益を被らないよう配慮した。しかし、あくまでも高知大学の授業に興味があり日本現地の授業を体験するとともに、自身の日本語力を向上させるという目的意識を持った学生という位置づけのため、成績や単位は出さず聴講の形をとった。

### 3.2. ハイブリッド型授業の内容

本授業は、論理的な文章力及び発表する能力の習得を目的として、学習者主体の双方向型の活動をベースに設計された。オンライン学習ツールとしては、大学が推奨するMicrosoft Teamsを使用し、週2回全30回の授業はリアルタイムのインタラクティブな対話をしながら進められた。教材はTeams上に掲載しておき、事前に予習しておくことを前提とし、授業では学習内容の実践的な内容を教員と学習者間の質疑応答や学習者同士の相互のやり取りをしながら確認していった。また、毎回の授業では受講した感想を200字程度で書くという課題を課しTeams上で提出してもらい、次の授業の冒頭でその場で教員が受講生の感想の添削を施すフィードバックとともに前回の復習をし、その日の授業に入っていくという構成にした。

今回実施されたハイブリッド型授業の内容は、表3のとおりである（表3参照）。

授業では、通常日本語の作文ならびに発表能力を向上させる授業とは別に、特別講義として授業担当教員以外の国際協力及び日本語教育が専門の教員4名(対面2名、韓国からの遠隔参加2名)が自身の専門に関する講義を行った。テーマは、「異文化間コミュニケーション」、「日本社会におけるビジネスマナー」、「雑談力の習得」、「ディベートで学ぶ論理的な話し方」であった。その際は、受講生の他に協定校の日本語専攻の学生も共に学ぶ機会が提供され、中国の協定校からはクラス単位での参加があった。

表3 ハイブリッド型授業の内容

回	実施日	授業内容	回	実施日	授業内容
1	10.02	オリエンテーション「論理的な文章とは」	16	12.01	首尾一貫した文
2	10.06	自己紹介(WeChatによるグループワーク)	17	12.04	句読点の使い方
3	10.09	自己紹介 個人発表・質疑応答Ⅰ	18	12.08	句読点以外の記号の使い方・原稿用紙の使い方
4	10.13	特別講義Ⅰ「異文化間コミュニケーション」	19	12.11	レポートにおける引用
5	10.16	自己紹介 個人発表・質疑応答Ⅱ	20	12.15	特別講義Ⅲ「雑談力を身につけよう」
6	10.20	より良い自己紹介・発表の仕方 自己紹介動画の自己・他者評価Ⅰ	21	12.18	段落の構成Ⅰ（段落内の構成）
7	10.23	自己紹介動画の自己・他者評価Ⅱ 敬語を使った自己紹介の方法	22	12.22	日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅰ 自己紹介・ピア・レスポンス活動
8	10.27	学習者の作文修正練習 話し言葉と書き言葉	23	12.25	日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅱ 自分の立場・主張・反論・根拠・結論
9	11.06	書き言葉らしさ（軟らかい・硬い書き言葉）	24	01.05	段落の構成Ⅱ(段落相互・文章全体の構成)
10	11.10	発表/論文・レポートの文体Ⅰ	25	01.08	仕組みの説明Ⅰ・意見文の書き方
11	11.13	特別講義Ⅱ「日本社会におけるビジネスマナー」	26	01.12	仕組みの説明Ⅱ「多文化共生社会」
12	11.27	発表/論文・レポートの文体Ⅱ(練習)	27	01.19	分類「日本語の出自」
13	11.02	自動詞や受身形を使った文	28	01.22	学習者同士のピア・ラーニング活動
14	11.24	助詞「は」と「が」の使い分け	29	01.26	特別講義Ⅳ「ディベートで学ぶ論理的な話し方」
15	11.27	語や文の名詞化	30	01.29	最終発表「自分の主張」・レポート提出

\*18回目の授業の12月8日からは新型コロナウイルス感染者の増加により大学のフェーズが1から2に上がったため、対面教育の学習者も全面的にオンライン教育に変更になった。

また、ピア・ラーニング活動としては、通常の授業内での活動とは別に留学生との交流を希望する日本人学生に特別に参加してもらった上で2回の活動を行うとともに、最終発表の準備として学習者同士の活動も1回特別に時間を設けた。日本人学生との活動は、グループやペアに分かれて身近なものを使った自己紹介や共通点を探し、自分の今年及び来年の漢字、学習者の作文のピア・レスポンス活動や意見文を書く前の「最近頭にきたこと」に関する話し合い等が行われ、作文の修正や発表の準備段階としての位置づけとした。さらに、最終課題である「時事問題に対する自分の主張」の発表前にも学習者同士でピア活動を行い、発表内容について吟味しあった。

### 3.3. ハイブリッド型授業の設計

ハイブリッド型授業には、小椋(2021a)によると、「オンラインに寄せた形態」と「対面に寄せた形態」の二種類の形態が考えられる。「オンラインに寄せた形態」では、通常のリアルタイム型オンライン授業と同様に実施し、受講生の一部が遠隔で、一部が教室で受講する形態で、教員は教室からZoom等の遠隔会議システムを用いて授業を行うと述べている。この形態では、対面側の受講生も自身のPCを教室に持ち込み、遠隔会議システムを通じて授業に参加することも可能である。留意点としては、音声のハウリングを防止するため、教室内の教員と受講生の全員がヘッドセットを使用する、あるいは受講生のPCの音声をミュートにするのいずれかの対策が必要になる。また、「オンラインに寄せた形態」では、教員の説明、受講生の質疑応答、受講生同士のグループワークは対面側とオンライン側を区別することなく、遠隔会議システムを介して行われることになる。

小椋(2021a)は、「対面に寄せた形態」では、従来型の対面授業にオンラインからの参加を可能にした形態で、教員と対面側の受講生は教室で通常通りの対面授業を行い、教室での口頭説明や板書は遠隔会議システムを用いてオンライン側に配信すると説明している。留意点としては、一方通行の知識伝達型講義では問題にならないが、質疑応答やグループワークが授業設計に組み込まれている場合、教室でのやりとりとオンライン側のやりとりが相互に伝わるよう映像・音声機器の設置・運用に細心の注意を払う必要があることが述べられている。また、「対面に寄せた形態」でグループワークを実施する場合、対面側とオンライン側の受講生が混在したグループを組むことはできないとのことである。

このように、ハイブリッド型授業を設計する場合、従来型の一般的な教室の設備に加え、ハイブリッド型授業に対応した教室の整備の必要性が生じるが、小椋(2021a)では、ハイブリッド型授業を設計する上で考慮すべき原則として以下の3点を挙げている。まず、対面と遠隔の学習内容をできるだけ一致させ「受講者は対面と遠隔の違いを意識せずに授業に参加できる」こと、次に教員の負担が大きい授業形態ではあるが「教員は余計な機器操作が不要で授業に集中できる」こと、最後に、遠隔では得られない「対面の価値を確保する」ことである。

2番目の原則の教員の負担について小椋(2020)では、ハイブリッド型授業の短所として、「教員は対面側とオンライン側の受講生の両方に配慮する必要」があるため、「教室での口頭説明、板書および質疑応答の内容がオンライン側にも着実に届くように工夫」しなければならないと述べている。また、オンライン側の受講生からの質問にも対応する必要があるので、映像・音声機器の設定や切り替えが煩雑になりがちで、教員がそれらの機器の操作に気を取られると授業の流れが妨げられることになることを指摘している。したがって、ハイブリッド型授業では教員以外の技術支援員やTAのサポートが必要になるとのことである。

#### 3.4. ハイブリッド型授業の実装

2020年度第2学期に実際に実施された対面側とオンライン側の受講生が同時に同じ内容を学ぶハイブリッド型授業では、使用機器としてwebカメラとマイクが内蔵されたWindows搭載のPCと大型モニター、板書用としてのタブレット端末(iPad)、教員のホワイトボードの板書を映す外付けのwebカメラ等を使用した。小椋(2021a)が言う「オンラインに寄せた形態」と「対面に寄せた形態」の二つの形態で授業は行われたが、教員はいずれの場合でもMicrosoft Teamsを用いてオンラインで同時配信するためのPCと教材を共有するためのiPad、不測の事態に備えるべくスマートフォンを常備した。オンライン上で参加する学生は、クラスの雰囲気づくりと効率的な協働学習をするため、インターネット環境が整っている場合カメラをオンにして授業に参加することを推奨した。また、スマートフォンアプリのWeChat上にグループを作り授業のメンバーを登録し、協働学習や授業での連絡の補助手段として活用した。

「オンラインに寄せた形態」における板書はタブレット端末を使用し、PC

のMicrosoft Teams上で開いた「会議」に別のIDでiPadから接続した上で授業資料を共有し、そこに付属のタッチペンを用いて書き込みや重要事項にマーキングを施した(図3・4参照)。



図3 オンラインに寄せた形態での実装

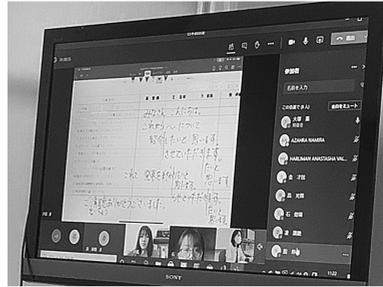


図4 iPadを用いた共有画面

「対面に寄せた形態」においては、ホワイトボードに教員が書き込んだ板書を配信するために、外付けのwebカメラでホワイトボードに板書している教員の姿を映し出し、Microsoft Teams上のカメラの設定を切り替えオンラインで受講している学生に配信した(図5・6参照)。



図5 対面に寄せた形態での実装

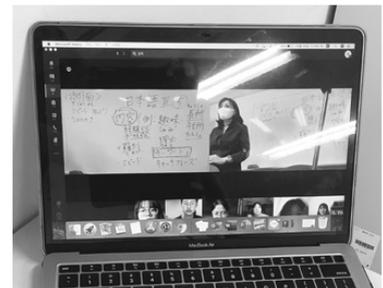


図6 対面で受講している学習者の画面

2020年度第2学期当初は、Teams上では機能上ペアワークやグループワークなどの学習者間のインタラクションをするためのブレイクアウトルームを作成する機能がなかった。その代用としてTeams上にチャンネルをいくつか作成し、学習者がメインの「会議」から抜けて、チャンネル上の「会議」に分かれて入ることで、そこでディスカッションをすることができた。しかし、メインの「会議」から抜けてチャンネルで新たに「会議」を立ち上げなければなら

ないこと、メインの「会議」に戻ってくる時間の表示が徹底されないことの2点の問題点があった。そこで、学習者が所持しているスマートフォン上のWeChatの通話機能を使用し、メインの「会議」は維持したままで対面の学生とオンラインの学生同士のペアやグループを作り協働学習を実施した。それにより、教員の活動に対する指示が明確に反映され、時間やグループ管理も徹底された上でピア・ラーニング活動がスムーズに行われた。

また、対面で受講する学習者が教員からの設問に回答する場合、オンライン教育で受講している学生まで音声が届かないという問題が生じることがある。そのような場合、スピーカーフォンを教員のPCに接続し対面の学生の音声を拾うと授業の進行がスムーズになる。オンライン受講をしている学習者はインターネット環境により音声の問題が生じた際に備えて、本授業は全ての授業を録画しTeams上で共有した。それにより、授業の復習や学生が欠席した際に授業内容を確認した上で課題を遂行することができた。

なお、本ハイブリッド型授業を実施する上で、教員は対面とオンラインの二つの場の管理が必須となり、対面のみやオンラインのみの授業と比較し負担が大きくなり、映像や音声機器の切り替えや質疑応答への対応などに右往左往することになった。そこで、教員を補佐する技術補佐員やTAの存在は必要不可欠になると言える。

#### 4. ハイブリッド型授業の評価方法

今回行われた各授業では、授業終了後に受講生が授業の感想を書いてTeams上の「課題」に提出した。また、学期の最後に15週間を通して学習を続けた学習者4名(正規生2名(中国1名、韓国1名)、協定校の学生2名(中国1名、台湾1名))<sup>4)</sup>に対し、「授業終了アンケート」調査を実施した。アンケート項目は、「授業の満足度」、「授業の利点・改善点」、「対面教育との比較」等を挙げた。感想や意見の記述以外の客観的な評価項目は、「十分」が5点、「かなり」が4点、「普通」が3点、「あまり」が2点、「不十分」が1点の5段階で評価してもらった。

#### 5. ハイブリッド型授業における学習者の満足度及び感想

今回の授業に対する学習者の評価は、5段階中平均で4.78であり好評価を博した(表4参照)。2019年度に同目的で行われた対面授業においては、学習者の評価の平均が4.31であり、特に学習者の授業への出席度と教員の教授法、

教員の課題の説明、教員の熱心度、教材の難易度、授業の満足度に有意差が生じた。また、授業に対する学生の積極性以外の項目では、おしなべて2020年度のほうが高い評価になっていることが分かる。

表4 ハイフレックス型授業の評価

		5	4	3	2	1	2020平均	2019平均	2020-2019差
1	授業に対する積極性	1	3	-	-	-	4.3	4.4	-0.1
2	授業への取組度	3	1	-	-	-	4.8	4.5	0.3
3	授業への出席度	3	1	-	-	-	4.8	4.0	0.8
4	学びの習得度	3	1	-	-	-	4.8	4.4	0.4
5	日本語力の向上	3	1	-	-	-	4.8	4.4	0.4
6	授業の難易度	3	-	1	-	-	4.5	4.1	0.4
7	授業の課題量	3	-	1	-	-	4.5	4.3	0.2
8	教材の難易度	4	-	-	-	-	5.0	4.0	1.0
9	教員の教授法	4	-	-	-	-	5.0	4.3	0.7
10	教員の学生の困難点に対する理解	3	1	-	-	-	4.8	4.5	0.3
11	教員の課題の説明	4	-	-	-	-	5.0	4.4	0.6
12	教員の熱心度	4	-	-	-	-	5.0	4.5	0.5
13	授業の満足度	3	1	-	-	-	4.8	4.2	0.6
平 均							4.78	4.31	0.47

学習者の感想では、ハイブリッド型授業の利点として、対面での受講生は「自分の都合に合わせて授業のやり方を選ぶことができる」、「人数が少なかったため、先生が学生一人一人に関心を持っているということが感じられてよかった。また、授業が終わった後、気になる点ができたら録画を見れば解決できるので、その点もよかった」との感想があり、Beatty (2020) が長所としていた学習者側の選択 (learner choice) と繰り返し利用可能 (reusability) が挙げられていた。オンライン受講の学生は「日本に行けなくても授業に参加できた」、「日本現地の学生と話し合うことができた。また、授業に参加している学生の各地域の文化やおもしろい生活習慣を知ることができ、異文化交流の魅力が直感的に感じられた。コミュニケーション能力や論理的な文章を書く能力が身についた」という感想が述べられ、Beatty (2020) の同等の内容の学び (equivalency) とともに直感的に感じる異文化交流の楽しさや協働学習によ

るコミュニケーション能力の向上に言及していた。

一方、ハイブリッド型授業の改善点としては、対面の受講生は「特になし」と回答していたが、オンライン受講の学生は「設備・通信状況などの問題で接続に時間がかかる」、「インターネットの接続状況が良くない場合授業に支障が出る」とあり、インターネット環境や設備により授業へのアクセスが左右される様子がうかがえた。特に、「対面教育の学生が回答する際の音声聞き取れず、授業内容が分かりにくい場合があった」という声もあった。

授業内容に関しては、対面の学習者は、「外国人留学生として難しいレポートの作成など論理的な文章を書く力を養い、グループワークを通してお互いに知ることができ、発表やスピーチを通じてコミュニケーション能力まで養え充実した時間だった」、「協定校の学生たちはTeamsを通してこの授業に参加しているので、いろいろな文化に触れることができる点がとても良い」との感想を述べていた。また、オンライン受講の学習者は、「Microsoft Teamsを通して世界各地から来た先生とクラスメートと知り合いになり、交流の中で論理的な文章をさらに理解し、日本語の会話能力も高めることができた」、「自分の聴解力とコミュニケーション能力が鍛えられた。各国からの友達と知り合え一緒に授業を受けられることが新鮮だった。みなさんはとても優秀なので、自分の会話レベルや日本語能力をさらに向上させることができた」と述べ、実際に来日しての留学はできなかったものの、オンラインを通して世界で日本語を学習している学習者同士がともに学ぶ機会に恵まれ切磋琢磨している様子が見られた。

ピア・ラーニング活動に関して、対面の学習者は、「最初はみんなメディアの使い方が未熟で試行錯誤も多かったしコミュニケーションが円滑にできなかった点もあったが、WeChatやTeamsでは自分が発言する時間以外ミュートにしておき、『はい』や『いいえ』を明確に答えることを注意するなどしていった。その後、オンライン上の学生の声もきれいに聞こえるようになり、コミュニケーションに大きな問題がなくなった」、「(少人数に分かれてのグループワークは)最初は人によってネットの状況が異なるので聞きにくい部分もあったが、最後にはクラスメートと話が弾みみんなの熱意で授業が面白くなった。私は話すのが苦手で授業で口を開きにくくなってしまわないかと心配したが、意外にもこのようなやり方がお互いを早く認識させてくれた」という感想が述べられていた。オンライン受講の学習者は、「各国から来ている学生なのでタスクの共通点を探すのは簡単ではなかったが、交流を通

じて一つ二つの共通点が見つかったとき興奮した。最初は話すとき緊張したが、このような機会にみなさんと一緒に交流するのが楽しい、「発達したインターネット環境のおかげで、海外の学生と知り合え、日本の授業を受けられるのは新鮮で貴重なチャンスだと感じている。みなさんと一緒にいろいろ交流してお互いにより深く分かり合える機会になった」と述べ、各グループでコミュニケーションを取り合いながら積極的に質疑応答を通じた交流が活発に繰り広げられていることがうかがえた。

授業後の感想の提出に対する教員のフィードバックに関しては、対面の学習者は、「協定校の学生たちと一緒に言う日本語授業では、授業を始める前に前回の授業に対する学生たちの感想をフィードバックする時間を持つ際、みんながどの部分に対して興味を持ったのかが分かるので、私も授業で学習した内容に対してもう一度確認することになるという長所がある」、「学生の感想から日本の成人式や大学入試、年中行事などをテーマに各国の違いを話し合う時間があり、本題の授業に入る前に、日本と関連した文化に対して勉強することができて良い。その上、自分の国の文化についても調べてみて比較するようになり、さまざまな効果があった」と述べ、多様な学習者の感想を聞くことで視野の広がりが感じられた。オンライン受講の学習者の感想では、「自分が日本語で文章を書いたり話したりするときに間違いが多いことに気づいた。先生が指摘してくださった箇所を復習し日本語をしっかりと学んで第二外国語として自然に日常生活や職場で使えるようになりたい」、「前回の授業を復習した上で、自分の文章の間違ったところが分かり大変役に立った。文の構造や日本語らしい表現方法、助詞の使い方など、これからより注意して文章を作成していきたい」と述べられており、本授業の論理的な文章を書く力の養成に一役買っていることが分かった。

授業担当教員以外が行った特別講義に関しては、それぞれの授業の満足度が4.5以上であり、各専門家の授業内容ならびに対面教育とオンライン教育の受講生同士の交流に関しても高い評価が得られた。各授業の受講生の感想としては、「先生の経験から違う文化を持っている人々との接し方を学ぶことができ、大変興味深かった。自分の世界はまだ小さいので、視野を広げられるようになりたい。メタ認知や国際援助企業について興味を持つようになったので、将来海外で活躍したいと感じた」、「ビジネスに関するマナーについて大変分かりやすく充実した内容で、有意義なスキルが習得できた。講義は質問に回答する形で行われ、交流が増えるにつれ面白さを感じ、リラックス

した雰囲気の中で受けることができ、とても楽しかった」、「雑談力に関する新しい概念を理解し、グループワークにも積極的に参加した。今回の授業を受けた後、初対面の人も雑談ができるようテクニックを利用して実践的に練習したい」、「論理的な話し方について例を挙げながら学んだので、どの場合にどの前提が使えるかなどが分かるようになり満足している。今回学んだ『結論』『理由』『根拠』『結論』という方式を今後の発表で使うつもりだ」とあり、楽しみながら専門的知識を学んでいる様子が見られた。また、「協定校の学生と一緒に授業を受け、互いの考えを知ることができた。新しい先生や学生たちと授業を受けてとても新鮮で気分転換にもなった」、「時差があるが、みんな各国からオンライン授業に参加できるのは不思議な気分だ。同じ時間に授業を受け、それぞれの学生が側にいる錯覚があり、違う場所においても授業の内容について共感できる」とあり、特別講義が協定校間の交流にも効果的であったことが分かった。

## 6. ハイブリッド型授業における協働学習に関する考察

今回の授業は、2020年10月から始まり、2ヶ月あまりハイブリッド型授業を行った後、新型コロナウイルス感染者の急増により12月初旬からリアルタイム型オンライン授業が実施された。ハイブリッド型授業実施時には教員のPCでメインの「会議」を立ち上げ、協働学習時には学習者が所持するスマートフォン上のWeChatの通話機能を活用してメインの「会議」を維持したまま学習者間の協働学習を実施した。その際、最初は機器の使用法やインターネット環境の不備により円滑なコミュニケーションに支障をきたすという事態が生じた。しかし、2回目の接続以降は機器の取り扱いにも慣れ、オンライン上でのコミュニケーションのストラテジーを教室内で確認し徹底したことにより、コミュニケーションが円滑に行われている様子が確認できた。ただ、対面の学習者は協働学習をする際、「教室にいる他の学生の声により集中力が妨げられた」という声も一部挙がっており、対面の学習者間の距離やヘッドセットの装着等の工夫が必要になってくることが分かった。

また、12月初旬から全面的にリアルタイム型オンライン授業に変更になったが、それに関する対面の学習者の感想としては、「初めて行ったオンライン授業は思ったよりスムーズであった。むしろ、iPadの画面を共有して授業を進めたため、大型モニター上で見なければならなかった対面授業の場合と比べ、直接自分のノートパソコンの画面で見ることができ、大変楽であった。

また、授業を進めながらも途切れることなくスムーズに進行し、不便な点はまったくなかった」とあり、リアルタイム型オンライン授業がハイブリッド型授業よりも授業の進行が円滑に行われていたと述べている。オンライン受講の学習者も「今回は全員オンライン授業を受けて楽しい時間を過ごした。以前は時々教室の学生の話し声がきちんと聞き取れなくなったり、授業内容が途切れたりすることがあったが、オンライン授業になって音声の問題がなくなった」と述べており、ハイブリッド型授業においては音声が最も問題になっていることが見受けられた。教員にとっても、ハイブリッド型授業は対面教育とオンライン教育の二つの場で授業が同時に進行している状況であり、両者に神経を遣いながら授業を実施するのは、通常の対面授業もしくはリアルタイム型オンライン授業より数倍疲労感を伴う。その上、ハイブリッド型授業に使用する設備や機器は常時通常教室に備えられているわけではなく、授業ごとに設置し機器の確認をしてもインターネット環境により不備が生じる場合もあり得る。ハイブリッド型授業が進行している最中も板書や質疑応答等でカメラや音声の切り替えの作業が常に生じる状況であるので、教員の負荷を減らすためにも授業補助者やTAの配置は必要になるであろう。

受講生同士のピア・ラーニング活動では、小椋(2021a)では、『対面に寄せた形態』でグループワークを実施する場合、対面側とオンライン側の受講生が混在したグループを組むことはできない」と述べていたが、今回の授業では、通常授業時に対面側とオンライン側混在のペアやグループでお互いの意見を交換し合う時間をできるだけ設けるように試みた。そのような活動により、受講生は「宿題を確認する時間を持ったが、ペアでお互いに話し合いながら正解を類推する活動が良かった。一人でも正解を考えることはできるが、会話をしているうちに相手を説得させるために論理的に説明しなければならぬため、スピーキングの練習はもちろん、より活発に議論を進めることができた」と感想を述べている。このように、受講生同士のピア・ラーニング活動により「リアルタイムで異なる国の事情が分かること」や「一方的な授業の形式ではなく、学生が双方向のやり取りを通して授業に参加し意見の共有ができること」、「互いの意見を交わしながらリソースが増えること」、「授業の気分転換ができること」、「自身の日本語力の内省が促されること」等の利点が挙げられた。日本人学生との活動では、その利点に加え、「日本人学生と一緒にグループワークをすると、オリジナルの日本語の発音を聞くことができる上、作文についてのフィードバックも日本人の立場から指摘してく

れ役に立った」、「初めて日本人の学生と一緒に勉強できて楽しかった。環境の影響を受け、雰囲気は左右されてみんなの熱意で話を楽しむようになった。また、他の人に質問を受け内省が促されありがたかった」と感想で述べられているように、日本語ネイティブならではのコミュニケーション能力やストラテジー自体が挙げられると言えよう。

このように、通常の授業時からモバイル機器を利用してピア・ラーニング活動を取り入れることで、対面教育とオンライン教育で受講している学習者間でのやり取りが活発化し、クラスの一体感や授業に対するモチベーションの維持が図られたことが分かる。その結果、2020年度に行われたハイブリッド型授業の満足度は5段階評価で4.8となり、2019年度第2学期に同目的同内容で実施された対面授業<sup>5)</sup>の満足度4.2とはかなりの開きが生じた(表4参照)。これは、2020年度に行われたハイブリッド型授業が、その利点を活かした授業設計により受講生がモチベーションを維持しながら主体的に授業に取り組めたことが要因だと言える。具体的には、授業ごとにその日の授業の感想を提出させることで授業を振り返った上で自分なりに調べ学習をしつつ復習を行うことができたこと、次の授業の冒頭で受講生の感想を可視化し、それに対するフィードバックをすることで受講生の発言の機会を保証する仕掛けづくりをしたこと、その上で、授業内ではピア・ラーニング活動を中心とした授業設計を行い、対面教育ならびにオンライン教育で受講している学習者が分け隔てなくコミュニケーションを図ることができたことが挙げられる。学習者の授業を受けた全体の感想として、「先生が情熱的に学生一人一人の日本語をコーチして、毎回感想コメントをフィードバックしてくれありがたかった。習っても習っても忘れてしまうのが外国語だが、この授業のおかげでもう一度日本語に関して復習する良い機会になった」、「半年間の授業を受けさせていただきとても感謝している。最初は緊張しすぎてよく話せなかったが、最後にはみなさんと交流ができるようになった。この変化はとても嬉しい。先生と学生さんたちのご指導・ご協力に大変感謝している。今後もさらに頑張りたい」と述べている。このように、少人数で行われた授業において、教員がファシリテーターとして学習者に日本語力向上の道を示し伴走することで、学習者が授業に積極的に参加し主体的な深い学びが促されたと言える。

## 7. まとめと今後の課題

今回のハイブリッド型授業を通して学習者の評価は5段階中4.78で高評価を博し、特にハイブリッド型授業のメリットを活かした教室と海外にいる学生とのピア・ラーニング活動を主軸に据えた授業設計によるクラスの雰囲気づくりの形成や討論・発表を通じた内省、異文化理解の視点の獲得等が利点として挙げられた。また、対面教育の受講生とオンライン教育で受講している受講生間でスマートフォンアプリのWeChatを介した協働学習が行われることで、相互のインタラクションを促し学びの拡充が見られた。その上、対面教育とオンライン教育の学習者を授業の補助手段として用いたモバイル機器で繋ぐことで、教員にとっても授業や時間の管理がしやすいという利点もあった。さらに、特別講義として授業担当者の教員以外の専門家が自身の専門性を生かした講義を海外からオンラインを通して受講生ならびに海外の協定校の学生に提供してくれたことは、今後のハイブリッド型授業の可能性を拡げることに繋がるであろう。このように、ハイブリッド型授業の利点を活かした授業設計が学習者の主体的な授業への参画に功を奏したと言える。

今後の大学における授業形態は、対面教育とオンライン教育とを組み合わせた形式であるハイブリッド型授業が主流になると言われている。鈴木(2020)は、今後の実践的遠隔授業法として「無理はしないこと、同じ形ではなく同じ価値を追求すること、順序を変えること、教え続けることではなく学生が学び続けることを大切にすること、非同期で学生の学びを支えること、そして平時になっても使えるオンラインの要素を探すことだ」と述べている。今後も学習者にとってより良い学びの方法を模索するとともに、PCだけでなく普段持ち歩いているスマートフォンやタブレット端末を補助的に活用し、よりインタラクティブな授業を設計していきたい。

## 附記

本研究は、令和2-4年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号20K00886「国際共修による学習者主体の遠隔ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究」(研究代表者：大塚薫)の助成を受けて実施された研究である。

## 注

- 1) 厚生労働省「水際対策に係る新たな措置について」に関するホームページによると、2021年11月5日に国内の新規感染者数が落ち着いたことから、外国人の

新規入国制限を見直す「水際対策強化に係る新たな措置(19)」が公表され、それに伴い国費外国人留学生が入国できるようになった。しかし、2021年11月29日に新興株オミクロン株の発見に伴い、2021年11月30日午前零時以降日本政府の「水際対策強化に係る新たな措置(20)」により再度日本への外国人の新規入国が全面的に停止になり、2022年2月末までは留学生の受入れが停止されている。

- 2) 2021年4月に協定校から高知大学に交換留学を希望する日本語専攻の学生22名中オンライン留学をした学生は10名であり、2021年10月には留学を希望する学生19名中オンライン留学をした日本語専攻の学生は3名(うち日本語・日本文化研修留学生1名含む)であった。そのうち、2021年4月から1年間オンライン留学をする予定だった交換留学生3名は、半年のみオンライン授業を受講した時点で辞退した。
- 3) オンライン教育を希望した学生9名は、2020年度第1学期に協定校から留学を希望していた日本語専攻の学生17名と2020年度第2学期に希望していた学生31名を合わせた合計48名の学生にメールで連絡をした上で応募してきた学生である。
- 4) 今回のハイブリッド型授業は、もともと対面教育3名、オンライン教育9名で始めたが、最後まで受講した学生は対面教育が2名、オンライン教育が2名であった。オンラインで受講していた協定校の学生は、聴講生であり単位や成績も関係なく拘束力がないため、自身の学業やアルバイト等の都合により脱落していったという経緯がある。
- 5) 2019年度第2学期に対面教育で行われた上級日本語授業は、受講生が8名(中国3名、韓国3名、台湾1名、マレーシア1名)であり、今回のハイブリッド型授業と比較してもクラスサイズにそれほど差がなく、受講生も東アジアの留学生が中心であった。

#### 参考文献

- 赤堀侃司(2020)『オンライン学習・授業のデザインと実践』ジャムハウス
- 宇田光(2021a)「バーチャル・スクールの現状と課題：(2)にわかバーチャルユニバーシティは次世代大学に脱皮できるか」『南山大学教職センター紀要』第7号、南山大学教職センター、pp.12-26
- 宇田光(2021b)「ハイフレックス型授業の可能性と課題：(1)理論と大学での実践」『南山大学教職センター紀要』第8号、南山大学教職センター、pp.14-23

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部(2020)「対面とオンラインを組み合わせる(ブレンデッド教育とは)」

<https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/project/onlinelecture/blended-education.html> (2022.02.07閲覧)

大塚薫(2019)『日本語ネイティブ遠隔参加型グループ別ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究』平成27-29年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究課題番号15K02640研究成果報告書

大塚薫(2021a)「キャリア支援教育を軸としたピア・ラーニング授業の構築—Microsoft Teamsを活用した同期型オンライン教育と対面教育の比較を通して—」『高知大学留学生教育』第14号、高知大学国際連携推進センター、pp.31-45

大塚薫(2021b)「学習者の主体的学びを導くハイフレックス型授業の構築」第26回留学生教育学会年次大会Proceeding、pp.73-74

大塚薫・王勇萍(2013)「日中二大学間協働日本語遠隔授業の構築—授業内容の樹立を中心に—」『高知大学留学生教育』第7号、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門、pp.65-81

小椋賢治(2020)「オンライン・対面の併用(ハイブリッド)型授業の分類と特徴」  
[https://note.com/kenji\\_ogura/n/ne52d88668505](https://note.com/kenji_ogura/n/ne52d88668505) (2022.02.07閲覧)

小椋賢治(2021a)「ハイフレックス型授業の概念設計と実践」  
[https://note.com/kenji\\_ogura/n/nc283f5a8f86e](https://note.com/kenji_ogura/n/nc283f5a8f86e) (2022.02.07閲覧)

小椋賢治(2021b)「オーディエンスレスポンスシステムslidoを使った双方向型授業」  
[https://note.com/kenji\\_ogura/n/ne9b76a40be6d](https://note.com/kenji_ogura/n/ne9b76a40be6d) (2022.02.07閲覧)

京都大学高等教育研究開発推進センター(2021)「ハイブリッド型授業とは」  
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php> (2022.02.07閲覧)

厚生労働省(2022)「水際対策に係る新たな措置について」

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431\\_00209.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00209.html) (2022.02.07閲覧)

鈴木克明(2012)「遠隔教育者を支える同価値理論と交流距離理論」日本教育メディア学会第19回年次大会(東北学院大学)発表論文、pp.27-28

鈴木克明(2020)「実践的遠隔授業法」『IDE現代の高等教育』2020年8-9月号 特集テーマ【経験してみた遠隔授業】

鈴木克明(2021)「withコロナ時代における日本語授業の設計—インストラクショナルデザインの手法を生かして—」『第30回小出記念日本語教育記念研究会予稿

- 集』小出記念日本語教育記念研究会、pp.6-14
- 高橋美能(2021)「イギリスの学生と東北大生のオンライン交流の意義と効果—双方の学生が共に取り組むプロジェクトを事例に挙げて—」『留学生交流・指導研究』Volume23、国立大学留学生指導研究協議会、pp.135-136
- 當作靖彦監修・李在鎬編(2019)『ICT×日本語教育—情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房
- 林雅子(2021)「留学生の学修機会拡充を目指したハイフレックス(HyFlex)型国際共修授業」第26回留学生教育学会年次大会Proceeding、pp.21-22
- 藤本かおる(2019a)『教室へのICT活用入門』国書刊行会
- 藤本かおる(2019b)「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究—担当教師へのインタビューを中心に—」『JeLA学会誌』Vol.19、pp.27-41
- 藤本かおる(2020)「授業のオンライン化に際しての教員支援の試み」『Musashino University Smart intelligence Center紀要』第2号、pp.83-93
- 古内綾子・齋藤伸子・池田智子(2021)「ハイブリッド型中堅日本語教師研修の開発と実践」『第30回小出記念日本語教育記念研究会予稿集』小出記念日本語教育記念研究会、pp.69-72
- 山崎真伸(2021)「オンライン言語学習プログラムによる内なる国際化への取組—海外協定大学学生とのオンライン学習プログラムの実践報告—」第26回留学生教育学会年次大会Proceeding、pp.7-8
- Beatty, B.(2020) *Hybrid-Flexible Course Design Implementing student-directed hybrid classes*, EdTech Books <https://edtechbooks.org/hyflex> (2022.02.07閲覧)

おおつか かおる  
(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授)